

# 中村哲さんを忘れない（福岡小学生新聞Wecan! vol.32-P7）



# 中村哲さんを忘れない —アフガン復興に人生を捧げた人—



昨年12月4日、アフガニスタンで医師の中村哲さんが銃撃され、亡くなりました。73歳でした。福岡市で開かれたお別れ会には、全国各地から5000名もの人が集まり、中村さんが好きだったバラの花が、静かに手向けられました。日本から遠く離れたアフガニスタンという国で、35年にわたり、現地の人の立場に立ち、現地の人と一緒に汗を流してきた中村さん。福岡出身の偉大なる先輩は、どんな人だったのでしょうか。

## 医者、井戸を掘る

虫学科に進学したかったものの、「趣味で」大学なんて」と厳格なお父さんに許してもらえない九州大学の医学部に進みました。卒業後は、日本の病院で精神科医として働きました。そして1978年、好きな蝶や昆虫を見たいとの理由で、登山隊の医師として初めてパキスタンや隣国のアフガニスタンへ向いました。同級生のお父さんは蝶を集めていて、お父さんとお母さんのふるさとの北九州市若松区で幼い頃を過ごし、小学2年生で古賀市に引っ越しました。そこで決定的な出会いがありました。同級生のお父さんは蝶を集めています。『誰も行かない所でこそ、自分が必要とする』とされ、シャワールルで働こうことにしました。

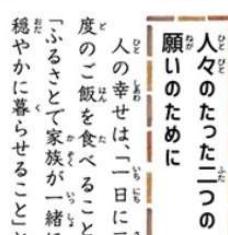


**愛した幼少期**  
中村さんは、1946年に福岡市で生まれました。お父さんとお母さんのふるさとの北九州市若松区で幼い頃を過ごし、小学2年生で古賀市に引っ越しました。そこで決定的な出会いがありました。同級生のお父さんは蝶を集めています。『誰も行かない所でこそ、自分が必要とする』とされ、シャワールルで働こうことにしました。



中村さんはバキスタン人やアフガン難民のハンセン病の治療を続けました。多いときには一日に70名もの診察をしました。患者の多くが山奥の病院がない地域の出身だったため、アフガニスタンの山間部などに、10カ所の診療所を開設し、貧しい人たちの病気を治しました。

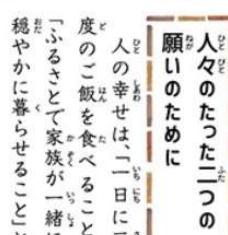
そんな中、2000年、アフガニスタンは大干ばつに襲われます。農地は砂漠になり、次々と村が消えました。そして何日もかけて診療所にやってきた母親と子どもが、列を待つ間に息を引き取りました。「水と食べ物さえあれば、助けられなかつた小さな命を目の前で見てきた中村さんは、井戸を掘ることにしました。その数は1600カ所にもなりました。しか



「もう人は住めない」と言っていた砂漠化した土地は、水が届くことで、あつた田植えができ、麦や米、オレンジなどが実る大地となりました。市場も復活し、難民や兵隊になっていた人は次々と村に戻り、65万人が暮らせるようになりました。一本の用水路が命をつなぎ、アフガニスタンの人々に平和をもたらしました。

「道で倒れている人がいる」と周囲に話していた中村さんは、道半ばにして銃弾に倒れました。日本やアフガニスタンだけでなく、世界中の人がその死を悲しまいました。皆さんのが住むこ

と、江戸時代の技術を取り入れ、朝倉市の山田堰計画を書きました。現地で土木を学び、自ら設計図を取った。元の農民を集めて、一緒に石運びをし、重機にも乗り、7年かけて用水路を完成させました。考へていた中村さん。かつて穀物自給率が93%もあつた豊かなアフガニスタンの姿を取り戻すこと



「もう人は住めない」と言っていた砂漠化した土地は、水が届くことで、あつた田植えができ、麦や米、オレンジなどが実る大地となりました。市場も復活し、難民や兵隊になっていた人は次々と村に戻り、65万人が暮らせるようになりました。一本の用水路が命をつなぎ、アフガニスタンの人々に平和をもたらしました。

「道で倒れている人がいる」と周囲に話していた中村さんは、道半ばにして銃弾に倒れました。日本やアフガニスタンだけではなく、世界中の人がその死を悲しまいました。皆さんのが住むこ